

水中特攻・戦争体験記

滋賀県 本郷 三郎

一 空から海への特攻隊員

少年の頃から「飛行機乗り」にあこがれ、夢が叶って昭和十八年十二月一日、満十七歳で三重海軍航空隊奈良分遣隊に志願入隊、第十三期海軍甲種飛行予科練習生となった。世にいう飛行機乗りの「予科練」である。短期で即戦用の飛行機乗り養成のため学科・訓練のつめこみはものすごく、まさに土・日のない「月月火水木金金」の猛勉強が強いられた。このような生活に耐え、ひたすら自分は御国のために役立つ立派な海軍軍人としてまた優秀な航空隊員となることを夢みつつ十代の青春をかけていたのである。

入隊後八ヵ月経ったある日、航空隊の上層上官より分隊ごとの練習生一同に戦局の情勢変化の話と共に水中、水上特攻の必要性を思わしめるような、またそれ

への志願について希望調査が行われた。

上官の話を知りても、我々には戦局が日本に不利になつていゝとは知らされず、しかも飛行機の生産が進んでいなかったことも知らされないままに水中、水上特攻隊希望を強制されるような話であつた。

この希望調査にはほとんどの練習生は二重丸で特攻希望に応ずることとなつた。その結果は私の場合、当時この話の調査に応じた二万人位の練習生の中から第一次選抜二百人の中の一人となつた。理由はおそらく私が三男で電気の工業科課程を終えているからだろ。二百人は昭和十九年九月一日予科練を中退、広島県の呉軍港近くの秘密の島の第一特別基地隊に入隊することとなつた。ここは海軍の厳密、極秘のところであることがまず我々に到着とともに知らされた。ここには世に特殊潜航艇といわれた極小潜水艦が製造されているところであつたのだ。

そのため小さな海軍工廠があり、特定の海軍軍人がその潜航艇に搭乗し訓練するところであつた。基地の隊内には真珠湾攻撃で軍神になつた九軍神の祠があ

った。海軍兵学校卒業の士官がうようよと動き走りまわり、特殊な雰囲気があったよう活気あふれる様子が入隊直後の私達に感ぜられたのである。

数種類の特種潜航艇が私達新隊員の目に入ったが説明は厳秘のためになかった。予想もしなかった水中特攻兵器に出会ったのである。九ヵ月間、飛行機、海軍航空機を勉強してきたが全く異質の兵器と出くわしたのである。しかし基地での上官の話や基地の様子になれてくるにつれ、我々の誓いも新たなもの変わってきた。「飛行機乗り」が「水中特攻隊員」になったのである。九軍神に続き、一身を捧げて皇国興廢のために尽くすのだと、軍神の杜祠の前で誓う日々が続いた。我々には敵艦攻撃の重要な任務が与えられたのだと。

二 特潜の訓練へ

九月二日第一特別基地隊に到着後数日を経て大竹潜水学校へ入校、一ヵ月間の潜水艦についての基礎勉強、潜水艦に同乗しての潜水訓練見学を修了し、直ちに神奈川の海軍工機学校へ転校、電気、内燃機、直流発電機等についての特別教育を受講した。この両校とも我

々の身分や所属隊については一切厳秘、学校での階級が若い下士官であるだけに注目の存在であった。工機学校における体操時間中の海軍棒倒し競技は特別關魂あふれる凄まじいもので学校内をにぎわすものであった。

特攻隊員の卵をぶつけあう闘志、關魂も学校での教育も終り、十一月半ば基地隊に帰隊、早速特種潜航艇についての学習、搭乗訓練となる。初めて乗艇同乗が許されたのは三人乗りの甲標的丙型という艇であった。甲標的というのは特潜の秘密用の呼称である。真珠湾攻撃に使用されたのが甲標的甲型で二人乗りだから丙型は内燃発電機付きの改良型である。

二十年の一月の訓練海域である瀬戸内海の安芸灘も毎日荒天が続いた。その中での同乗訓練での海上走行、潜航訓練、浮上してのジーゼル発電機の運転、充電、作業訓練等の繰返し訓練は真剣そのものであった。荒天時の浮上走行は大きな波におおられ全員ふらふらの船酔いには鍛えに鍛えた海軍軍人もさすがにたまらなかつた。

しかし荒天の海も一度深さ五メートル以上も潜航すれば波の影響も全く受けず、海の中の走行は非常に静かな気持ちよい航行だった。荒天浮上航行から一転して海中航行に変わったときの安堵感は今もって忘れられない。

二月になるといよいよ実戦用の訓練に入る。艦長と艇付四人のペア編成が行われる。このペアが今後生死をともしする仲間だ。この五人を中心にした訓練が開始されることとなる。各種の条件における艦船魚雷攻撃、二発の搭載魚雷を如何に有効的に発射するののかの訓練だ。航行する敵艦攻撃や南方の諸島を想定した島と島、その湾内への進入、狭水道進入の訓練、また浮上中敵飛行機の襲撃を避けるための急速潜航訓練等であった。これらの訓練はそれぞれ危険をともしなう訓練であり、訓練中の失敗による仲間の殉職も度々であったことを知ることが多かった。

三 自分達専用の艇とともに

昭和二十年二月頃いよいよ実戦参加のため自分達五人のペアのための専用艇が決まることとなった。その

艇は「甲標的丁型二一五号艇」であった。丁型特潜を通称「蛟龍」と呼ぶ。秘密の倉橋島の小さな工廠で工廠員と我々ペアがともに自分達が専用に乗艇する艇を一から製作することが始まった。製作は一カ月もかからずに完成し、進水試験とともに引き渡されることとなるのである。工廠員と我々一体となった昼夜を分かたない建造、機装等寝食を忘れた毎日であった。

「蛟龍二一五艇」の艇長には川越中尉、艇付には横操舵、魚雷発射担当の石毛上等兵曹、縦操舵、電気担当の角谷一等機関兵曹、予科練出身、通信担当の松井二等飛行兵曹、予科練出身ジーゼル発電担当の本郷二等飛行兵曹と部署が実戦攻撃用として決められた。

新造の艇での実戦用訓練が始まる。艇の性能を熟知するため艇のバランス調整も行い、またまた一から各種の訓練を安芸灘、豊後水道方面の広域で行うこととなる。三月四日となると天候も次第に好天と変わり、訓練も荒天時と違い気分的に余裕がもてることとなった。

しかし海上浮上中には米機グラマンによる襲撃に遭

遇することが何回かあった。潜水艦も潜航艇も意外と機銃射撃には弱いものだから、これらを避けるには潜航するより手がないのだ。さらにもう一つ弱いのは敵の布設した豊後水道の機雷や駆逐艦により落下される爆雷による被雷だった。

四 特攻戦隊に配属

三月の沖繩戦で戦局も極度に不利にむかい、日本の太平洋沿岸には米国艦隊が接近し、本土への艦砲射撃があるのではないかと思われる時期、三月二十日には大本営海軍部による「決号作戦計画」が発表された。それにより敵船団の洋上及び水際撃滅を重視する作戦が展開されんとした。

四月二十五日海軍総司令部を設置、司令官には豊田副武連合艦隊司令長官が兼務し、同司令官は天皇に直屬し、作戦に関し全海軍部隊の指揮系統を一元化したのである。

この「決号作戦計画」の中に連合艦隊司令長官直屬の部隊である特潜による第十特攻戦隊が編成され、私達は「蛟龍」六基で第一〇一突撃隊を編成、「波号一

〇九号潜水艦」とともに機動特攻戦隊として終戦前の連合艦隊の主力となった。航空母艦も戦艦も壊滅的になくした日本海軍連合艦隊の最後を守る一艦一艇の一員となったのである。

五 特攻戦隊隊員の任務と使命感

所属した第十特攻戦隊に与えられた任務は、一つには太平洋沿岸洋上における敵艦隊の邀撃であり、二つには沖繩にある米艦隊、船団への奇襲攻撃であったように記憶している。

我々特攻戦隊所属潜航艇は五月には第一特別基地隊を離れ、大分県の佐伯軍港を基地として愛媛県の三机、三崎港、高知県の宿毛港、大分県の松浦港等を寄港地として豊後水道海域を訓練場所とした。日本の空も米国の制空域支配に近づきつつあるとき、我々水中特攻隊員に課せられた任務と使命は重大そのものであった。

しかし、世界に誇った戦艦「大和」が撃沈されるような戦局下では沖繩攻撃を特潜でするなんて及びもつかない戦局でありながら、特攻隊員達は必ず沖繩にあ

る敵艦隊を攻撃するんだとの使命感に燃えていたのだ。

上官から教えられた軍人精神、特攻精神には「武士道とは死ぬことと見つけたり」という葉隠精神を教えられ、この精神を忠実に実行すること、即ち自分の一身を任務のために捧げることを誓っていたのだった。任務遂行には絶対死を恐れない人間として完成されていたのだった。九軍神の大先輩に続くことが祖国日本を護ることと信じていたのである。自分の命が自分の命でないと考えることも、すべては軍人教育のしからしむるものである。

教育は人間性を左右するだけでなく人の命の存在をも左右するのだった。五人の隊員には軍歴も違い階級もそれぞれ異なる身分、しかし生死をともしする仲間、五人の中、だれ一人として死を避けることはできない中、同じように階級、身分を越えて必死報国の使命感に徹していたことを今更ながら当時を回想するものである。今考えれば日本の軍国主義教育は空恐ろしいものであった。

六 「一〇一突撃隊」の想い出

昭和二十年三月末に第一特別基地隊より数隻の特潜艇が出撃し、その二隻の中には私と同じ予科練出身の同僚が四名参加していた。彼等は私達予科練出身の中で最も早く実戦参加した人達であった。

大浦の基地から沖繩に航走しつつ出撃していく彼等を私達は別の船舶で海上を数キロも見送り、互いに帽子を振りながら激励し、彼等の成功を祈りつつ別れを惜しんだものだった。出撃の順番からいえば私たちもこの沖繩出撃に入っても不思議ではない状態であったが、限られた数の参加からしかたがなかった。参加にもれたことを非常に口惜しく思った。

しかし彼等の出撃は沖繩に無事に到着したものでやそうでない人たちもいたことを後日知った。出撃参加にもれた口惜しい思いを抱きつつ、五月になって本格的な特潜による特攻隊が編成された。それが参加の「第十特攻戦隊第一〇一突撃隊」だったのだ。記憶は薄れているが、私たちはこの特攻戦隊の編成の中で一番早く編成に参加したものだ。終戦年時最後の連合艦

隊の主力でもあった。考えれば誠に弱々しい連合艦隊だったのだ。開戦前世界に威容を誇った帝国海軍の連合艦隊の末路は哀れであったのだ。

そんなことは一切わからない私達には連合艦隊直属であることに誇りをもち、その任務の重大性に喜びと責任の重さを感じていたのであった。五月か六月か記憶に乏しいが、大分県の佐伯航空隊の我々の基地で当時の連合艦隊司令長官豊田副武大将から特攻隊員に直接激励の言葉があり、かつ一人一人に激励と成功を祈るお神酒が酌がれた。感激と勇氣百倍したものだ。

特攻戦隊の当時の作戦目標は具体的に何だったのか、今になっても知るよしはないが、その作戦の一つに沖縄占領後の米艦艇を沖縄に向かって攻撃することがあった。沖縄にある中城湾のその中にいる米艦隊、船舶を攻撃する「中城突撃」のことがいまだに頭に残っている。突撃の期日がいつに予定されていたのか、この小さい蛟龍艇がどうして敵しい敵の空海陸にわたる警戒の中で航行し目的を果たせるのか、この疑問は後で思うことだが、とにかくこの目標に向かって豊

後水道の両側にある漁港を仮基地にして訓練と出撃の待機をしていた。

訓練には、洋上における潜水母艦からの魚雷の「蛟龍艇」への装填移動や圧縮空気の装填等も行っていた。だが、このような訓練を重ねながらもついには突撃命令を受けることはなかった。それほどに敵の総戦力は日本本土に近づき圧倒した戦力をもって本土に向かっていったのだのであろう。

訓練の範囲も豊後水域より一步鹿児島数十キロの洋上程度だったのであろう。とても支那海域に及ぶことは至難の業だった。もうその付近には敵の潜水艦や駆逐艦が数多く、しかも制空権は完全に敵の掌握下にあった。

七 豊後水道海域での危険

二十年二月、三月頃の安芸灘や豊後水道における初期訓練中には各地の漁港に寄港し、田舎の旅館や港の村の集合所に泊めてもらったりした。暇があれば漁村の舟に乗せてもらって魚釣、タコ壺あげに興ずる楽しい日も何度かあった。海も空も平穏なときは高知沖で

のカツオ釣にも同船させてもらったことがあった。船乗りでなければ味わうことのできない戦中閑の体験であった。

五月以降になればこの豊後水道も太平洋沿岸も海上は波平穏だが戦局はただならぬ大きなうねりが押し寄せてきたのである。

いつの間にか敵の機雷が豊後水道や瀬戸内にも数多く布設され、一部の機雷は浮遊し触雷の危険にさらされた。

太平洋沿岸には敵潜水艦の出没もだんだんと繁くなつて漁船など一切海上航行は困難、我々特潜艇でさえも昼間浮上航行は絶対危険、しかも制空権の敵支配下においては昼間は海だけでなく空からの襲撃を受ける危険があった。

誰かの何かの触雷によって機雷が我々の近くで爆発するのを何回か見たことがある。機雷とは何百メートル何キロ離れていたのかわからないが、その威力はすごいものだった。海中の音波は空中の三倍だが、鉄の筒に

なっている特潜艇の中で受ける爆発音の高さ、大きさは耳をつんざくような衝撃音であった。もうこれで沈没、おしまいかと思つたことがある。よくぞ機雷の餌食にならなかつたことか、この爆発にはだれかが、どこかで犠牲になつている筈なのである。

こんな近海の危険な中でも、特攻隊の中で培われた攻撃精神だけは堅持し沖繩突撃の目的だけは忘れることはなかつた。どんな危険にさらされても軍人たるの本分である七生報國の精神は捨てることはなかつたのだ。

八 生死の境地に母の面影

海軍一等飛行兵曹に任官したのが六月一日付、同僚同期の人は私達のように特別選抜され、水中特攻に参加した以外の多くの人は二等兵曹になりたてだったらしい。我々は生きて一階級特進だった。特進には普通胸をはり肩もいからし誇らしげにするのだろうが、我々にはそんなこと微塵だにもなかつた。戦闘配置中のことだから階級章を渡されることもなし、毎日絹織の上下一体となつた搭乗服を着ての生活、その服には階

級章はついていない菊水の特攻章が腕についているだけの飛行服姿なのだ。特別昇進されていることも忘れられているし、意識する必要もなかった。

その六月末の頃か、「一〇一突撃隊」にある種の行動があった。波号潜水艦の母艦とともに数隻の特潜「蛟龍」がともに広島島の第一特別基地隊を離れ行動を起こした。出撃命令による出撃ではないが立派に実用魚雷を二発もって、すべては出撃態勢での出撃であった。

ただいつもの基地出発と変わりないでたちで見送るものも見送られるものも帽子を振り交わす別れの挨拶であった。しかしこの日の基地の岸壁には基地司令部の上層幹部がいつともなく長く長く帽子を振り別れを惜しむかのようにだった。いや我々に何かの期待と祈りをしているようにも見受けられる別れであった。

出撃であるような出撃でないような出撃だったのも極秘行動の必要性からだったのだろう。

それぞれの艇は整備万全、燃料、食糧は一週間の航行に耐えられるだけの充分さ、潜水、浮上に必要な圧縮エアも充分な朝早くの出発、よく馴れよく承知し

た航図、海図の上で承知した安芸灘の島々に別れを告げ、四国愛媛周辺の伊予灘を水上航走しながら、今日の到着地の高知県宿毛港にある基地へと向かうのだった。

戦列は波号潜水艦が先頭で六隻の「蛟龍」が二小隊に別れ一縦列になったり一小隊毎の傘型になったり、互いに無線交換をしながらの航走をつづけた。勿論海上航走には内燃機と発電機による電池充電はかせない静かな航走だった。しかし海上航走には危険がつきものの敵機の来襲、機銃射撃に見舞われたことがある。潜水艦は鉄のかたまりでありながら以外と機銃弾には弱いだった。瀬戸内で島影から現われるグラマン機にいじめられることも何回か経験したことがある。もしも「蛟龍」艇のメインタンクの覆いである薄い鉄板に弾による穴があげられれば沈没の恐れが充分あるから飛行機を侮ることは危険だった。

しかし、その危険がついに到来したのだった。生死の境をむかえる時がきたのだ。伊予灘を過ぎ愛媛の佐田岬と大分の佐賀関半島に挟まれた豊後水道にさしか

かった時、例によって数機のグラマン機による襲撃をうけることになった。一隻の母艦と「蛟龍」とが同時にである、これを避けるのは潜って避けるより方法がない、浮いて応戦の手段は全くないのが特潜艇、直ちに各艇一斉に急速潜航、まるで琵琶湖のカイツブリが一斉に水中にもぐるかの様、潜ればわれのもの、飛行機のこわさは全くというほどない。

しかしこの急速潜航はわが艇に最大の危険をよんだ。あわてたのか、この日の潜航角度はいつもより急だったのか、技術のまずさなのか、艇のバランス調整が悪かったのか、これまで深さ一〇〇メートルの海底に沈座して難を避けたり、海底休養というか海底で時間をとることはあったが、突っ込んだことは初めてである。艇の先端には二発の魚雷を持っている。おそろく発射管の先端は損傷し、使用にたえないだろうと、まずその方に一番気がまわるのだった。五人の乗員が何よりも先に思ったことはこのことだった。口には出さなかつたけれど、潜航してより一〇分位、母艦の波号潜水艦からは水中信号による「ツーツト」の音が

一〇〇メートルの海中まで聞こえてくる。この信号は浮上せよとの命令信号である。

もう危険も去ったのか、全艇浮上して海上航走するのだ。わが艇もメインタンクに一杯圧縮エアを送り込んだ。だが微動だに浮上の気配はなかつた。エアがもれているようではなさそうだ。前方に傾いた状態の艇だから、推進モーターをバックにかければと、バック推進したがこれにも艇はいうことをきかなかつた。半時間位、この浮上手段を繰り返したがどうしようもない。浮上できなければ海中殉職か、戦死なのだ。こういう遭難はいくつか例を知っているので直感的に殉職するのだと口にはださねど覚悟はした。

五人の隊員、艦長を始めそれぞれの覚悟は同じだったであろう。浮上への手段はすべてをつくした後は天命を待つより方法がない。半時間の時は長かつた。無言の艇長、艇付四人の声も出ない。後は死地が近づいてくるだけの予感が走る。無言の中に艇長の動作だけが気になるが五人の思いはそれぞれ何を考えていたのだろう。思いは目的を果たさず死んでゆく悔しさ、恥

らしさが頭の中を横切るのだ。ただただ無念と不忠の
気持が一杯だった。

子科練に入隊、帝国海軍軍人として一年と七ヵ月、
ただ一筋に敵艦の一つも二つも撃ち、死をもって皇國
の興廢と危急存亡に寄与せんとしたのにと重ねて思い
をいたす一時でもあった。くやし涙がひとしく五人の
目から流れている。互いの目頭が充血していることが
わかる。

潜行後四十分位経過している。遺書は基地に残して
ある。書く必要はない。自決用のピストルでいつ引き
金を引くかだけが残された時間だけだ。

残念、くやしさを乗りこえてあとは自分の生い立ち
がよみがえってくるのだった。この世に生を受けて十
九年、よみがえる思いはただ故郷のこと、学校の同級
生、親戚知人、親兄弟のこと、水と緑と田園の中に育
った子供の時の想い出に胸がさかれるような思いがせ
まってくるのだった。

これらの人に別れを告げることもなく、親に孝を尽
くすこともなく死地にむかってゆくさまを恥じるかの

ような時間だった。功なさず大死にすることの悔しさ
がまたこみあげてくるのだった。

その中でも、その時、わけても私の胸に脳裏に一際、
きつく、強く、かすめたのは母の面影だった。入隊後
肌身離さず身につけていたお守り袋をはじめて開け
た。家を離れるとき千人針のかわりに渡されたお守り
袋。今まで中身を確かめたことはなかった。どこの神
様のお守りがいくつ入っているのかも知ることもし
ただ身につけていたのが、まさかこの袋の中に母の写
真が同封されているとは知らなかった。死の直前に母
と対面したのだ、写真を胸にきつく当て語る言葉も無
く涙を流す時が続く。再び故郷のことが、自分のあり
し日のよもやまの姿が、そして人、人の顔が走馬灯の
ようにかげめぐる。自分の乳児の姿も、母の乳房にす
がり母の愛を求める光景が、母に教えられた数々の思
いがかけめぐるのだった。父の姿も兄弟の姿もうかん
だ。しかし母の面影はきつくせまった。母の愛の強さ
を一際強く感じたのはこの時だったのだ。

神様に、父母に、この窮地から死地からのがれよう

と救いを求める思いはもうなく、ただただ母をはじめ多くの人の愛に感謝するのみで、その中でも母の愛の強さに思いが格別にせまったのだ。

もう上司のことも、天皇陛下万歳もなかったと思う。

沈没後一時間も経過しただろう。我が乗組員に天祐神助がやってきた。最後の浮上手段として残されエアを全部使って、電池も使ったの艇長の命がでた。手段はつくされた。すると突然艇がたついた。岩と岩にはさまれていたのだろう。岩間から抜け出し逆さになって急浮上したのだ。一瞬我に返った。難をまぬがれた一瞬、つまる思いから喜びに急変した。まさにそのとき、神風による天祐神助の偉大さと感謝した。母の愛の強さを体験し、天祐神助による窮地脱出と自負した体験も、今の世には考えられないことだし、話をきいても信じる人は無いだろう。ただ戦争体験者のみが見た感動と体験であろう。

九 単独航行の不安

「ツートト、ツートト」母艦よりの水中信号による「浮上せよ、浮上せよ」を何回か聞きながら一時間以

上も過ぎている。奇跡的な海中脱出の浮上の喜びも束の間、あたりには母艦も同僚艇の姿も見当たらない。二時頃か、天候も悪くないので視界は広く遠い、だがやはり視界の中には姿は見当たらない、短波無線による同僚呼び出しにも応答はない。全く海中遭難、殉死として見捨てられたのだろう。これからの不安が募る。

危険な航路が私達の行く末をさえぎることは必至だ。機雷、潜水艦が待ち伏せをしているような不安を感じる。しかしこの危険をおかしても今日の寄港地宿毛湾へはどうしてもたどりつかねばならない。今こそ鍛えた日頃の訓練と精神力によって任務をはたさねばならないのだ。母艦の助けも同僚艇の支えも何もない。ただ一人で茨や針の野山を歩くも同然、海上は次第に荒れ模様になりつつある。目の離せない海上警戒と監視がつづく。エアも電池も極度に消耗している。これでは二度と潜水することは出来ない。浮上航走と発電充電が必要、二度とグラマン機の襲来がないように敵潜水艦の攻撃がないようにただ祈るのみ。潜水艦が海中にもぐれないのは水鳥が両翼をとられたのと同然。

あとはまた神の助けにすがらぬのみ。

長い時間の緊張と疲れ、苦難と危険を乗り越えてどうにか宿毛港近くまで辿りつくことができた。初夏の六時過ぎはまだ明るい。しかし湾口に進入するには浮遊機雷の危険がある。宿毛湾に入るのは初めてのことだ。ハッチの上で航行監視にあたる私に対し艇長より再三注意と注視をうながす言葉がとんでくる。薄暗くなってきた湾口の注視を一瞬たりともおこたることは出来ない。

この注視の中に突然目の前に現われたものがあつた。突然敵潜水艦の待ち伏せと直感する。しかしこの潜水艦は動かないし、あまりにも小さいことに気付く。よく目を凝らすと我等の母艦ではないか、おそらく同僚の到着とは二時間か三時間は遅れている。ダメだと見捨てられた筈だと思いきや、母艦は我々を待っていてくれたのである。

長かった苦しみと極度の疲れの中に喜びがこみあげてきた。私達を発見した母艦の人達もホット溜息をつきながら喜んでくれたであろう。母艦に寄り添い、母

艦の誘導で同僚艇に合流、岩壁に着いた。同僚に肩をたたかれ、握手での喜び、無事に任務地に着いて、食前は祝杯と感動の一時であった。まさに神の加護と母の愛に抱かれたその一日であった。

過去の体験も間もなく五十年近くなる。だけど月日の経過は問題ない。たとえ人生の瞬間的な一コマであろうと、この体験は忘れようとも忘れることのできない貴重な体験だから。

十 作戦変更基地へ帰れ

八月十五日午後の何時頃だったか、四時頃だろうか、我々「蛟龍隊」の「一〇一突撃隊」は鹿兒島を離れての太平洋沿岸の洋上にいたのだらう、それぞれの艇の短波無線に入ったものは「作戦変更基地へ帰れ」との電報命令である。発信元は基地の特攻隊長からだった。理由は不明、命令は絶対的なもの、基地は大分県の最南端の軍港佐伯港である。帰港は十六日の午後おそく夕方だった。

上陸すると基地の様子がおかしい、我々特攻隊員には終戦とは知らされていない。あくまで作戦変更のた

めに基地へ帰ったのである。だが終戦の気配があたりから伝わってくる。どことなしに終戦の気配が感じとれてくるが真相は相変わらず知らされていない。艇長は知っているのだろうか？艇付の我々に知らそうともしなかつた。

十七日の夜には艇の水中航行に絶対必要な通常航海羅針盤ともいわれる「転輪」が我々の睡眠中に艇外に取外されている。また自決用のピストルも回収されている。知らされない理由は何だったのだろうか、どんな配慮が我々にあつたのだろうか。数日後知つた終戦の詔勅には天皇の命として服従するも、上司のかくし続けた態度と合わせ、やはり終戦という画された一線、それよりくる目的遂行を果たすことの出来なかつたことへの大きな反発心を呼び起こし、矛盾、虚しさ、憤りをおぼえる日が続くのである。

特攻使命に燃える我々には大きな精神的打撃だった。許されるものならば再び沖繩への突撃命令を願う気持で一杯だったのだ。「作戦変更」の命は一体何だったのだろうか。

十一 島中少佐の自決

島中少佐の自決は戦後の起つた終戦秘話として戦後史の一頁をかざる記事として有名になっている。

その当時、島中大尉は「蛟龍艇二一四号艇」の艦長であり我々の小隊長でもあつたのだ。私は「二一五号艇」の乗員、他に「二一六号艇」の三隻の小隊長で若い海軍兵学校卒の士官、闘魂あふれる新進気鋭の軍人、まさに特攻精神に燃えたぎる軍人、「一〇一突撃隊・第五一蛟龍隊」十二隻の専任小隊長でもあつた。

何を思いきや、十七日の夜、夜間訓練と称して島中大尉は艇付四名とともに実戦艇のまま佐伯軍港を出発、沖繩攻撃に向かつたのだつた。

しかし鹿兒島沖合にさしかかつた十八日の朝方、艇の転輪ジャイロコンパスが故障、それ以上の沖繩航行を断念、艇付四人には佐伯港へ帰るよう説得し、自分は自決用のピストルで自決死されたのであつた。この出港を誰が許可したのか、夜間訓練を許したのか、いまだにその謎は深くつまれている。艇長の死を大切にしながら四人の隊員は佐伯に帰つてきた。時に十九

日の午後二時頃だった。

帰港とともに畠中艇長の自決を知り、疲れた四人の艇付とともに遺体を艇外に収容することにした。毛布に包まれている畠中大尉の遺体をハッチより出す時、

私は遺体をだきあげハッチの外へ移しだしたことを今もしかと憶えている。佐伯の航空隊内で告別式が簡単に行われ、関係した「蛟龍」隊員の参拝者ともども同じ特攻隊員として血肉わけあった故人に別離をおしみつつ一夜を明かし、明けてその日は八月二十日だった。

何故、戦後にこのようなことが起ったのか、責任感のつよかった畠中大尉がどうしてどういう気持ちで沖繩に出撃しようとしたのか、この夜間訓練と称する出港を誰が許可したのか、まさに終戦秘話の一頁として永く海軍史に残されてゆくだろう。

十二 生きて帰途につく悔しさ

デマか事実か不明のことだが佐伯の航空隊では、敗戦の悔しさに抗しきれず航空隊員がガソリンをかぶって焼死したり、ピストルで自決死したりしているとの噂を耳にした。この噂には同じ軍人として多大の影響

を受けた。特別攻撃の目的を果たしえなかった悔しさ、畠中大尉に続きたい気持ち、いろいろの気持ちの交錯する中で死の途を選びたいと念ずる心がわくのは当然だった。

むなししい思いを抱きつつ佐伯から第一特別基地隊の大浦まで海上航行にて何隻かの艇が帰途につく。長い間の航行中、なつかしい島々をみながらいろいろの思いにふけりながら、あそこで、ここで、こんなこと、あんなことがあったと思いだしながら二度と再び見ることのない瀬戸内海の島々に別れを惜しむのだった。

帰途、無人島に二発の魚雷を浮上のまま発射し身軽な姿で色々の思い出をもって、大浦基地に着く。かつての工廠員の姿ももういない。隊員ももう少ない。知る人は特定の上司のみ。過去を語り合うすべもなく一夜を過ごし、明けて呉の軍港へと向い、かつて威容を誇った戦艦「大和」を製作したドックへ艇を返納。これで生死を共にした「二一五号蛟龍艇」とも永遠の別れ、そして苦勞を共にした同僚隊員ともしばしの別れを惜しんで帰宅の途についたのである。

帰途の船の中も、汽車の中も、話相手はない。ただ予備兵の一人が隊の命をうけて私の傍らに終始ついてくれた。だが話す相手にはならなかった。それは戦争に負けた悔しさ、生きて帰る身のむなしさが胸をかきむしっているからだ。

八月二十四日午後、大阪、京都駅を経て降車する石山駅が近づいてくる。帰途が近づく嬉しさはわいてこない。生きて帰る悔しさ、むなしさが、嬉しさをささえるからである。同乗した整備の隊員にさとされた一言「またお会いしますから家へお帰り下さい」との再会を約す言葉にうなずき石山駅を下車することになった。

夏の日は長い、午後の三時頃か、家へ帰る気が起らない。家に連絡する気も起らない。家路を脱線して粟津湖畔へ。ただ一人松籟の影の下で、ありし思いにふけり時を過ごす時間が夕方までつづく。ただ煙草をふかし!

日はもう、とつぷりと暮れた。夜に入ろうとした頃、家に着く。亡霊が帰ったかのごとく家族はびつくりす

る。その筈、今までの音信は外地扱いの所在極秘、おそらく生きて帰るとは思っていなかったから、家に帰った嬉しさと二度と家の敷居を生きてまたがないと誓っていた思いが交錯して二つの涙があふれてくる。

家族ともしやべりたくない、しゃべらない。思いは再び「蛟龍艇」へ、そして隊員に。戦場へと軍人としての任務を全うし終えたかったのだ。この願いを思い、毎朝四時頃人目をさけて氏神様に祈願する日が何日か続くという戦後の日々であった。

まさに終戦史を振り返り、時代にふさわしい時代史人が自分をふくめて存在していたことを強く思うのである。

青春をすべて戦争に軍人として投げつけ、青春を惜しまなかった軍人青年の一人の戦争体験記。そして今後も平和への戦士たらんと誓いを新たにしているものである。